

ICT時代の日本語学習者は どのような学習ツールを使っているか

日本語教師を対象としたワークショップ実施報告

鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子

【キーワード】 学習ツール、アプリ、ウェブサイト、日本語教師、学習者

1. はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センターは、文部科学大臣より「日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点」(平成24年度～平成28年度、平成29年度～平成33年度)の認定を受け、日本語教材開発のほか、日本語教育連携事業における教育プログラムへの留学生の受入れ、また実践教育研修事業における日本語教育専攻の大学生・大学院生の見学・インターンシップの受入れ等を行っており、留学生日本語教育センターの日本語教育にかかる資源の学外共同利用を進めることを通じて、日本語教育の発展と推進に努めている。また、事業の一環として、国際シンポジウムのほか、日本語教育の現場に密着した各種ワークショップも定期的に開催している。

本稿では、2017年度(平成29年度)に行われた上記拠点事業主催の第7回ワークショップ「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」の内容についてワークショップ担当者の4名(鈴木智美 東京外国語大学、中村彰 東京外国語大学、清水由貴子 聖心女子大学、渋谷博子 東京外国語大学)により報告を行う。なお、このワークショップは、日本学術振興会学術研究助成金平成29年度～31年度基盤研究(C)「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」(課題番号: 17K02842, 研究代表者: 鈴木智美)との共催にて行われた¹。

¹ ワークショップで報告を行ったアンケート調査の実施・集計には、森田寿香氏、および泉大輔氏(東京外国語大学大学院博士後期課程)にも協力をいただいている。また、藤村知子(東京外国語大学)も共催の科研グループのメンバーである。

2. ワークショップの概要

ワークショップの概要、および当日のプログラムは以下の表1、表2の通りである。

表1 ワークショップの概要

テーマ	「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」
日時	2018年(平成30年)3月9日(金)13:30～16:00 (16:00～17:00 情報交換会)
場所	東京外国語大学留学生日本語教育センター 1階103教室
対象者	日本語教育に興味・関心を持つ方(一般公開)
参加人数	68名(現役の日本語教師のほか、大学生・大学院生、日本語教師養成講座受講生、日本語学校職員、出版社勤務の方など)

表2 ワークショップ「ICT時代の日本語学習者は
どのような学習ツールを使っているか」プログラム

【第一部】日本語学習者の学習ツールの使用状況	13:30～14:50
1. 学習者はどんな学習ツールを使っているか： アンケート調査結果から見えるもの (担当：鈴木智美)	
2. 学習者の声： 現役大学・大学院生の留学生にツール使用について聞こう 〈ゲスト：現役大学生・大学院生の留学生〉 (担当：渋谷博子・中村彰)	
【第二部】日本語教師と学習ツール	15:00～16:00
3. 辞書サイト管理者の声： 辞書サイトを運営する元留学生からのメッセージ 〈ゲスト：キム・アールストロム氏(ウェブサイト「jisho」作成者)〉 (担当：鈴木智美)	
4. 教師のツール使用：教育をもう一度見つめよう (担当：清水由貴子・鈴木智美)	

ワークショップは、現役の日本語教師など日本語教育に実際に関わっている方を中心に、日本語教育専攻の大学生・大学院生や日本語教師養成講座受講生など、今後日本語教育に関わっていこうと考える方を対象として、広く一般公開の形で行った。

ワークショップのテーマは、日本語学習者が使用している「学習ツール」である。現代社会における情報通信技術等の急速な発展を受けて、日本語学習者たちが日々使用する学習ツールも、ここ10年前後の間に大きな変化を見せている。スマートフォンが普及し、各種アプリが開発され、学習に役立つ種々のウェブコンテンツも生まれている。いつでもどこでも気軽に情報にアクセスできることなどから、学習者の学習スタイルにも変化が見られるのではないかということも指摘されている(鈴木2017、鈴木他2018a)。

今回のワークショップでは、このような現状をふまえ、学習者の学習ツール使用状況についての調査結果を報告するとともに、実際にツールを使用してきた現役大学生・大学院生の留学生や、学習者の間で人気の日本語辞書サイトを開発・運営している元留学生にゲストスピーカーとして参加してもらい、対話形式でその「生」の声を聞き出す機会を設定することとした。そして、学習ツールを1つの切り口として、高度に情報化・スピード化する現代社会において、日本語教師と日本語を学ぶ人たち、教えることと学ぶこと、その役割や思いなど、私たちが日々その中にある日本語教育について、もう一度考えてみるきっかけ作りとなるように、ワークショップを構成した。

以下、第3節～第4節にて、当日のプログラム進行にしたがい、それぞれのセッションの担当者より内容を報告する。

3. 第一部：日本語学習者の学習ツールの使用状況

ワークショップ第一部では、学習者が実際にどんな学習ツールを使っているのかについて知り、情報交換を行うことを目標とした。まず、ツールについてのアンケート調査を行った結果について概要を報告し、次に、インタビュー形式をとり、現役の大学生・大学院生の留学生に、自身の日本語学習とツールについて振り返ってもらった。

3. 1 学習者はどんな学習ツールを使っているか：アンケート調査結果から見えるもの

3. 1. 1 調査の概要

ここでは、主として大学で日本語を学ぶ学習者が、ふだんどんな学習ツールを使用しているか、ワークショップを担当した科研グループが行っている調査について、この段階までに得た結果の報告を行った。報告を行った調査の概要は以下の表3の通りである。

表3 調査概要：日本語学習者はどんなツールを使っているか

調査時期	調査協力者(計379名)	調査方法
2016年12月 および 2017年7月	東京外国語大学留学生 223名 (交換留学生、研究生、予備教育課程国費留学生 など)	無記名式 オンライン アンケート
2017年11月	英国およびセルビアの大学における日本語専攻の 学生 156名	

今回のワークショップでは、上記調査結果についてその概要を報告したが、東京外国語大学の留学生223名を対象とした調査のうち、予備教育課程に在籍する国費留学生を対象とした調査結果の詳細については、別途、鈴木他(2018a)にて報告を行っている。また、同じく東京外国語大学で学ぶ留学生のうち、交換留学生等を対象とした調査結果の詳細については、別稿(鈴木他2019予定)にて報告を行う予定である。日本国外の大学における日本語学習者の学習ツール使用状況については、今回のワークショップでは、英国のリーズ大学(23名)、セルビアのベオグラード大学(133名)で行った調査の結果を取り上げた。日本国外における調査はその後2018年まで継続して行っており、英国、セルビアのほかに、オランダ、タイ、香港、エジプトの大学の調査協力を得て、計6大学388名から調査協力を得ることができた。これらの日本国外の大学における調査結果の全体についても別稿(鈴木他2018b)にて報告を行っている。

3. 1. 2 電子辞書使用の減少とアプリ使用の拡大

調査では、電子辞書、スマートフォンの各種アプリ、ウェブサイト、SNSや動画視聴などを含めたその他の活動について質問している。

まず、電子辞書については、東京外国語大学で学ぶ留学生 223 名のうち、「持っている」と回答したのは 55 名で、全体の約 25 % であった。同じく東京外国語大学の留学生を対象に「辞書」についてのアンケート調査を行った鈴木 (2012) では、2011 年の調査時、電子辞書を「非常によく使う」および「よく使う」とした回答が全体の 7 割であったことが報告されており、5～6 年という比較的短い期間のうちに電子辞書の使用が減少してきたことが見てとれる。英国・セルビアにおいても、電子辞書を持っているという回答はわずか 7 名のみであった。

これと対照的に、学習者の中で使用が広がっているのがスマートフォンの各種アプリである。上記の 2011 年の調査では、スマートフォンの「辞書アプリケーション」を「非常によく使う」および「よく使う」と回答した人は、まだ全体の 2 割程度しか見られなかったが、今回の調査では、「非常によく使う」および「よく使う」という回答が 77 % を占めた。日本国外の 2 つの大学の調査でも、全体の約 6 割が各種のアプリをよく使うと回答している。

ふだんよく使う具体的なアプリ名 (辞書アプリ、学習アプリなど) を 1 人 3 つまで挙げてもらったところ、東京外国語大学の留学生からは延べ約 300、90 種以上のアプリの名前が挙げられ、英国・セルビアの回答者からも延べ約 200、50 種以上のアプリ名が挙げられた。複数の人が名前を挙げるいわゆる「人気・定番」のアプリが見られる一方、1 回しか名前の挙がらない、即ち 1 名しか名前を挙げていないアプリの数も多く、多種多様なアプリが使用されていることがわかった。

また、各種ウェブサイトについては、「非常によく使う」および「よく使う」との回答は、東京外国語大学で 38 %、英国・セルビアの大学で 56 % であった。上記 2011 年の調査当時も、オンラインの辞書サイトについては「非常によく使う」および「よく使う」という回答が 45 % であったということから、ウェブサイトについては、引き続きほぼ一定数の使用が見られるようである。具体的なサイト名については、東京外国語大学で延べ約 200、50 種以上、英国・セルビアでも延べ約 220、30 種以上の名前が挙げられた。国内外をあわせ、よく使われるものとして特に集中して名前が挙げられていたのは、「Google Translate」² (多言語翻訳サイト) と、「jisho」³ (日英翻訳辞書サイト) であった。

以上、調査結果からは、アプリの使用が数年の間に急速に拡大したこと、ウェ

² 「Google Translate」(<https://translate.google.co.jp>)

³ 「jisho」(<https://jisho.org>)

ブサイトの使用も一定数見られること、使用されるアプリの種類は多様であること、多くの学習者の支持を得ている人気・定番のアプリやサイトがあるということなどがわかった。

3. 2 学習者の声：現役大学・大学院生の留学生にツール使用について聞こう

ワークショップ第一部の後半では、2名の現役大学・大学院生の留学生を招き、実際に学習者が学習ツールをどのように使っているのかについて、自身の経験を振り返りながら話してもらった。この2名はかつて東京外国語大学留学生日本語教育センターで日本語を学んだことのある修了生である。

事前準備としてそれぞれの留学生に1時間程度のインタビューを行い、ワークショップ当日は、その内容をもとに対話形式で話を聞くことにした。1名には日本語学習全般におけるツール使用について、もう1名には漢字学習におけるツール使用に焦点を当てて語ってもらい、最後に参加者との質疑応答を行った。なお、留学生の名前については以下、イニシャルを用いて報告する。

3. 2. 1 理科系大学生

一人目の留学生は、インドネシア人のT氏である。T氏は高校を卒業後、国費学部留学生として2016年に来日した。2016年4月から2017年3月までの1年間、東京外国語大学留学生日本語教育センターで予備教育課程に在籍し、初級から上級までの日本語、および専門分野の基礎学習を修了した後、2017年4月に国立大学に進学した理科系の学部1年生である。

T氏は、国費留学生としての採用が決まった後、来日に備え、独学で日本語について予習をしたという。この時、主に使用したツールは「TOFUGU」⁴(日本語や日本文化について英語で紹介されているサイト)、『Remembering the Kanji』⁵(漢字の書き方の習得にフォーカスしたテキスト)、「Memrize」⁶(学習アプリ)、「Anki」⁷(学習アプリ)であったとのことである。「TOFUGU」には、日本語や日本文化について英語で解説があり、T氏はこのサイトを通して、日本語についての

⁴ 「TOFUGU」(<https://www.tofugu.com/>)

⁵ 『Remembering the Kanji: A Complete Course on How Not to Forget the Meaning and Writing of Japanese Characters』(著者 James W. Heisig)

⁶ 「Memrize」(<https://www.memrise.com/>)

⁷ 「Anki」(<https://apps.ankiweb.net/>)

基礎的な知識を得たという。また、連想法による「かな」の覚え方も紹介されていたため、かなの習得に役に立ったとのことである。さらに、このサイトをもとに、自身でもストーリーを使って文字を覚えるといった工夫を行い、「Memrize」や「Anki」という語学学習アプリを使って練習したということである。これらのアプリはいわば旧来の紙製の単語帳が進化したようなもので、ゲーム形式による単語の暗記、自身のオリジナルの単語帳の作成、他のユーザーによって公開された単語帳の共有などが可能である。T氏はこのアプリの音声機能も利用しながら、ひらがなとカタカナを3日で習得したという。「Anki」の中には、漢字テキスト(上記『Remembering the Kanji』)に基づく漢字の意味についての情報もあり、読み方についての説明はなかったものの、意味をもとに3か月で漢字2000字を覚えたとのことである。

来日後、大学進学前の予備教育の段階では、コース使用教科書に付属して開発されたeラーニング教材「JPLANG」⁸をよく使い、「imiwa?」⁹という辞書アプリを使用し、引き続き「Memrize」や「Anki」を漢字や語彙学習のために使用していたということである。これらのツールの不便な点としては、「imiwa?」は手書き入力ができない点、「Anki」や「Memrise」は、公開された膨大な共有単語帳の中から自分に合った適当なレベルのものを選ぶのが難しいという点が挙げられた。

大学進学後は、日本語の講義を聞きながら日本語でノートを取り、すべて日本語で理解するというのは負荷が高く、学部1年生の1学期は非常にストレスが大きかったということであった。ただし、そのような状況でも、微かな言葉の違いについて、ほぼ毎日友人に質問するなど、努力を続けていった。ツールの使用にも変化が見られた。辞書アプリは、「midori」¹⁰という有料のアプリを使うようになった。「midori」は、覚えたい単語をブックマークすると、それらの単語がExcelファイルに自動リスト生成され、そのまま簡単に「Anki」(学習アプリ)の単語帳にエクスポートできるということである。これはそれまで使っていた無料の辞書アプリ「imiwa?」になかった便利な機能である。また、辞書アプリに載っていないが日常よく使われる言葉(擬音語や擬態語など)を調べる際には、日本人の友人から紹介された「新明解国語辞典アプリ」¹¹も使用するようになった。

⁸ 「JPLANG」(<https://jplang.tufs.ac.jp/>)

⁹ 「imiwa?」(<http://www.imiwaapp.com/>)

¹⁰ 「midori」(<https://itunes.apple.com/jp/app/midori-和英-英和辞典/id385231773>)

¹¹ 「新明解国語辞典アプリ」(<http://applion.jp/android/app/jp.ne.biglobe.shinmeikai.jp/>)

たのである。さらに、レポート等のまとまった分量の文章を書く時は「Google Translate」¹²で調べて表現のしかたを参考にしたり、より広くウェブサイト日本語の新聞記事を読んだりするようになり、ツールの使用の幅も広がった。

このように様々なツールを使いこなしているように見える T 氏だが、実は紙のノートも愛用している。大学に入ってから、日々大量の情報を処理しなければならなくなったことから、情報整理のために1冊のノートに何でも記録しておくことにし、1日の終わりに必ずそれを確認することになっているという。日本語に関係することだけでなく、専門分野に関係することも含め、気づいたことはこのノートに書き留め、疑問に思っていたことなどが解決すると、それも書き加えたりしているとのことである。

最後に、T 氏からの教師への要望として、以下の2点が述べられた。1点目は、教師からの学習ツール紹介である。学習者は必ずしも自分自身でいいツールを見つけられるとは限らないため、教師の目から見て、いいツールがあれば紹介してほしいということである。2点目は、学習ツールに関する学習者同士による情報共有の場を、教師からも設定してほしいということである。T 氏自身と友人との間で、学習ツールに関する情報には差があったということがあり、実感として教師に伝えたいメッセージとなった。

3. 2. 2 文科系大学院生

二人目の留学生は、ルーマニア人の M 氏である。M 氏はルーマニアの大学で英語・日本語を専攻した。在学中に日本語・日本文化研修留学生として来日し、2010年10月から2011年9月まで1年間東京外国語大学で学んでいる。帰国後、母国の大学を卒業してから日本語・ルーマニア語の通訳翻訳の仕事に就いていた。その後、再び勉学を志して来日し、2017年4月からは東京外国語大学大学院博士前期課程に在学中である。

M 氏は、高校生の時に見た日本映画がきっかけで日本語に興味を持ち、日本語のドラマを見たり、ひらがな、カタカナを独習したりしたという。文字についてはウェブで正しい書き方を調べて自身で間違いを修正したとのことである。あるウェブサイト¹³の情報から、漢字が表意文字であるということを知り、特に

¹² 注2と同じ。「Google Translate」(<https://translate.google.co.jp>)

¹³ 「LEARN JAPANESE Tae Kim's Guide to Learning Japanese」(<http://www.guidetojapanese.org/learn/grammar/hiragana>)

漢字に興味を持つようになったという。ウェブから「常用漢字」の一覧を見つけ、日本の小学校学習指導要領に定められている「学年別漢字配当表」を参考に、学年別に順に漢字を覚えていったという。漢字を学習する際には、まず漢字の中心的な意味を覚え、次にその漢字の音読み・訓読みを覚え、さらにその漢字を用いた熟語を学ぶといった手順を踏んだ。自分の漢字学習の方法をシェアする目的から、日本語能力試験N5レベルを対象とした漢字学習のためのウェブサイトを自身でも作ったという。そのほか、書籍形態の辞書では日本語・ルーマニア語の対訳辞書や英和・和英辞書、ほかにオンライン辞書¹⁴や筆順辞典のアプリなどを利用してたとのことである。

一方、M氏が日本語学習で困難を感じることとして挙げたのは、特に語の使い分けである。これまでは日本人が書いたブログ記事などを読んで実際の使い方を学んだり、日本語母語話者から使い方を訂正してもらったりしてきたが、現在は、日本語を対象としたコーパスなども充実してきたことから、例えば「現代日本語書き言葉均衡コーパス」¹⁵を自身で検索するなどして、語の使い方を学ぶようにしているとのことである。

また、M氏も日本語を学習する際の習慣として、気づいたことをノートにメモする習慣があり、勉強を始めてから計30冊ぐらいになったという。書いたものを読み返し、補足・修正などを加えることで、日本語学習には役立ったとのことである。

最後に、M氏から教師へのメッセージとして以下の2点が挙げられた。まず、日本語学習者といっても、それぞれに異なる学習スタイルを持つ場合があるので、教師から何らかの学習方法を提示・推薦する際には、複数の方法を示してもらえるといいということである。そうすれば、いくつかの可能性の中から、学習者は自分に合ったやり方を選ぶことができる。また、特に学習者の日本語レベルが高くなってからは、そのレベルにおける学習意欲に合致するように、いろいろな方向から刺激を与えてほしいということであった。

また、M氏の自身の日本語習得は、独学による漢字学習を中心に進み、日本の留学経験を経て、4技能のバランスのよい運用力上達へとつながっていった。

¹⁴ 「Babylon」(<http://japanese.babylon-software.com/>) 以前は無料のオンライン辞書サイトであったが、現在は有料で翻訳ソフトを提供している。

¹⁵ 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) 国立国語研究所
(https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)

このことから、M氏は、日本語学習における漢字学習の持つ意味を重視してほしいということである。漢字学習を、単に文字や語彙力の強化ととらえるだけでなく、非漢字圏の学習者にとっては、上級レベルに至るまでの日本語習得の成否を決める重要な役割を果たすものではないかと感じるということであった。

2名の留学生との対話を終え、ワークショップ参加者との質疑応答の時間では、学習ツールに関する質問のほか、学習に挫折した時の克服方法などについても質問が挙がった。

学習ツールに関する質問は、2名の挙げたツールがいずれも主にインプット（日本語を理解するため）のツールであったが、アウトプット（日本語を産出するため）のツールは使っているかというものである。この質問に対して、T氏からは「Tandem タンデム」¹⁶というアプリが紹介された。これは、学びたい言語をその言語の母語話者から学び、自分も自分の母語を相手に教えるというように、言語交換をして学習したい人たちが、互いにその相手を探すためのアプリである。現在大学で中国語の授業を履修しているため、このアプリで中国語母語話者と言語交換をしているということであった。ほかには「日頃から日本語だけを話すように心がける」「毎日日本語で日記を書くことを習慣にしている」といったことも述べられた。M氏は、新しく覚えた漢字の熟語は、パソコン（キーボード）で打ち込むことを習慣にしているとのことである。熟語の読みをかなで入力し漢字に変換すると、漢字表記の候補が表示される。その中から適切な表記を選ぶという作業自体が、学習のフィードバックのようになるということであった。

学習の挫折をどう克服するかについて、2名の留学生からは、何らかの形で自分の日本語力の伸びが実感できるような学習方法がとれるといいのではないかと、また、日本文化や日本人の考え方も含めて、少しずつ新しいことを知ることができるといことが、継続的な学習を支える動機になるのではないかとコメントが寄せられた。

4. 第二部：日本語教師と学習ツール

ワークショップ第二部では、今度は、学習ツールの作成者側に視点を移し、実

¹⁶ 「Tandem タンデム—言語交換」(<https://itunes.apple.com/jp/app/tandem-%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%87%E3%83%A0-%E8%A8%80%E8%AA%9E%E4%BA%A4%E6%8F%9B/id959001619?mt=8>)

際に日英翻訳辞書サイトを作成・運営する元留学生のキム・アールストロム氏に話を聞いた。そして、第二部後半のワークショップ最終セッションでは、それまでの3つのセッションにおける情報等を踏まえ、グループでの話し合いを通じて、学習ツールを切り口として日本語教師自身について振り返り、今後を考える機会を設けた。

4. 1 辞書サイト管理者の声：辞書サイトを運営する元留学生からのメッセージ

ここでは、第一部における「学習者の声」と同様に、担当者とゲストとの対話形式でセッションを進めた。以下、対話により得られた内容をまとめた形で報告する。

ゲストスピーカーは、スウェーデン・ストックホルム大学出身のキム・アールストロム氏である。かつて日本語・日本文化研修留学生として、東京外国語大学で1年間学んだこともある。3.1.2節で触れたように、調査の結果、学習者の間で定番とも言える人気のウェブサイトがあることが見えてきたが、キム氏は、そのうちの1つである「jisho」(<https://jisho.org>)の開発・管理をボランティアとして行っている。「jisho」は、大きくくくれば「日英翻訳辞書」のサイトであるが、種々のデータへの関連付けがなされており、検索によって得られる情報量が多いのが1つの特徴である。現在のバージョンは2014年から公開されたもので、2005年にその最初のバージョンである「Denshi Jisho」¹⁷というサイトがオープンしている。

新バージョンにおける大きな改良点は、対象となる表現の検索のしやすさであるという。検索ボックスには、日本語でも英語でも、またローマ字でも入力が可能で、検索の単位は語でも句でも、文、テキスト(文章)であっても、どんな単位でもよい。調べたい日本語の表現を入れさえすれば、形態素解析に基づき検索対象が解析され、適切な単位で区切られ、文法・意味、漢字表記の説明ほか種々の情報が答えとして返ってくる。キム氏の言葉で言えば、「単語を調べたい・漢字を調べたい・例文を調べたい」というように細分化するよりも、まず「日本語を調べたい」という利用者の利便性を考えたということである。キム氏自身が学

¹⁷ 鈴木(2012)によると、2011年の調査時において、よく使用するオンライン辞書として調査回答者の留学生の間から最も多く回答が集まったのが、この「Denshi-Jisho」であった。オンライン辞書を「非常によく使う」あるいは「よく使う」と回答した53名のうち23名がこれを挙げている。2番目に多く挙げられたのは「Google Translate」(16名)であった。

習者として日本語に触れてきた経験から、これから日本語に熟達していこうという人にとっては、日本語の表現を見た時に、どこが単語の切れ目であり、どの部分が複合された単位となっており、活用された形の元の形は何なのかというような情報を明らかにすること自体が複雑であり、いわゆる普通の「辞書」で「探せる形」に直すことがまず難しいということからである。

3.1節で述べたアンケート調査では、この「jisho」サイトの利用者からは、「操作がしやすい」「説明がわかりやすい」「デザインがいい」「入っている情報が多い」などの評価が多い。不便な点については「ない」という回答が最も多く、このサイトを「よく使う」と回答している人は、使いやすいからこそ、使っているのだということがうかがえる¹⁸。

キム氏によれば、現在のバージョンでもなお自身のアイディアの20%程度しか実現できていないということであり、今後、工夫・改良していきたいという構想が種々あるとのことであった。例えば、コロケーション情報の充実や、漢字の字体のバリエーションを載せること、曖昧検索を可能とすること、単なる対訳以上に言葉の説明を充実させたいということなどが挙げられた。

キム氏との対話を通じて、このようなウェブツールの持ついくつかの特徴が見えてきた。まず、このようなウェブツールは、ウェブ上に公開されている様々なオープンデータの活用によって生まれ、相互の関連づけを新たに加えることによって発展を続けているということである。キム氏が開発した「jisho」も、日英翻訳データや例文データ、漢字情報など、種々のオープンデータを活用し、組み合わせることで、使いやすい形で情報を提供することに成功している。また、このようなサイトの開発・管理が、アイディアと技術、および高い関心を持った個人あるいはグループの活動によって、多くの場合、無償の形で続けられていることも特徴であると思われる。さらに、このようなウェブツールは、利用者側からもコンテンツについての質問やコメントを随時SNSなどを通じてサイト管理者に届けることが可能であり、掲載されている例文等のデータについても、利用者自身が登録・参加することで修正等を加えたり、音声データを追加したりしていくことも可能となっている。また、ツールの開発者と利用者だけでなく、ツールの

¹⁸ なお、このワークショップの後、2018年6月に東京外国語大学で日本語を学ぶ留学生を対象に、ワークショップ「日本語学習者のための人気の辞書サイト『jisho』の作成者に聞こう!」を開催し、サイト作成・管理者のキム氏に、このサイトの具体的な特徴や使い方について、詳細に示してもらおう機会を設定した。学習者・教師を含め23名の参加があった。

開発者同士も互いの開発から相互に刺激を受け、データの相互利用を進めるなどして、有形無形のネットワークにおける相互交渉の中から、さらに改良が進められていくという性質を持っている。このような相互交渉の中でさらなる発展が可能となっているという点も、これらのウェブツールの持つ大きな特徴ではないかと思われる。

日本語を母語とし、日本国内で教えている日本語教師のほとんどは、日本語教育の現場において、このようなウェブツールの開発者のコミュニティとは、日ごろほとんど接する機会がないと思われる。学習者のツール使用の現状を見ると、今後、日本語教師と例えばツール開発者というように、異なるコミュニティ間の相互の交流や情報交換がより有益な形で進められるような機会を作っていくのが望ましいのではないかと考えられる。

4. 2 教師のツール使用：教育をもう一度見つめよう

ワークショップでは、第一部、第二部にわたり、学習者の学習ツールの使用をテーマに、学習者自身およびツール開発者からの声も交えながら、これまで教師が知らなかったこと、あるいは知りたかったがなかなか知るチャンスがなかったことについて、種々の話題および情報を提供してきた。

一方、教師たちのツールの使用実態はどうであろうか。また、ツールという観点から教育を見直すと、どのような課題や目標が見えてくるだろうか。最後のセッションでは、「教師はふだんどんなツールを使っているのか」および「学習者の声を聞いて感じたこと、教育を見つめ直して見えてくることは何か」の2点についてグループごとに話し合い、全体で意見を共有することにした。以下、上記2つの問いに対する参加者からの回答をまとめた形で報告する。

まず、「教師がふだん使っているツール」について、具体的なツール名、およびそれをいつどのように使うかを尋ねた。複数のグループから共通して挙げたのは、授業で語彙や文法項目を導入する際に使用するスライド作成のためのツール(PowerPoint)である。また、実物や実際のようなすを画像や動画によって提示したい場合に、インターネットの検索エンジン(Google 画像検索など)を使ったり、動画共有サイト(YouTube など)から適当なものを探しておくということであった。そのほか「日本語の例文」¹⁹(JLPTのレベル別に例文が表示されるサイト)、

¹⁹ 「日本語の例文」(<https://j-nihongo.com/>)

「リーディングチュウ太」²⁰(日本語読解支援システム)、「NEWS WEB EASY」²¹(やさしい日本語でニュースを伝えるサイト)、「NINJAL-LWP for TWC」²²(ウェブデータに基づく共起語検索ができるサイト)など、様々なサイトが挙げられた。教師のツール使用の中心となるのは、上記のように授業準備に用いるもので、スライド作成や動画・画像検索に使用する「定番」とも言えるツールがある一方、学習者の日本語レベルに合った例文を探す、コロケーション情報を確認する、読解教材の語彙や漢字のレベルを把握する、読解・聴解の教材候補となる素材を探すというように、そのほかの個々の目的で、各種のウェブサイトを使用しているということがわかった²³。

次に、教育における今後の課題や目標を考えるため、「学習者の声を聞いて感じたこと、教育を見つめ直して見えてくること」について話し合った。その結果、「まず、教師がツールに関心を持つこと」から始め「学習者に合ったツールを提示する」、教師自身がツールに詳しくなくても「学習者同士で情報共有できる場を設ける」など、今すぐ実践できそうなことから始めたいという意見が複数出た。第一部で現役の大学生・大学院生の経験談を聞き、「自ら学習方法を工夫できる学習者は、きっとアプリやサイトなどのツールがない時代でも、自分で学習方法を工夫していただろう」と感心する一方で、自身の教育現場を振り返ると「実際には自分に合った学習ツールや勉強方法を見つけれない学習者も多いのではないかと感じた教師もおり、「モチベーションを自分で上げることができない学習者にはどうしたらよいか」という課題も挙げられた。

本セッションの終盤では、「今後、教師は学習者にヒントや選択肢を与えるファシリテーターの役割となるべき」という意見も挙げられ、教師の役割や意識の変化が必要であろうという意見が複数挙げられた。また、日本語学習の目的が多様化した近年の状況を踏まえ、「教室での授業だけでは習熟度を上げるのが困難。今後は自律学習が欠かせない。その際に役立つような学習ツールが多様化しているのはよいことだ」と多様化する学習ツールを肯定的にとらえる声も多く見られ

²⁰ 「リーディングチュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp/>)

²¹ 「NEWS WEB EASY」(<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>)

²² 「NINJAL-LWP for TWC」(<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>)

²³ 本ワークショップの話題の中心が「ICT時代の日本語学習者の学習ツール」であったため、参加者からは基本的にパソコン上で利用可能なソフトや検索エンジン、サイトが挙げられた。しかし、少数ではあるが、教師のよく使うツールとして絵カードや文字カードといった紙媒体のツールも挙げられた。

た。最後に、実際に学習ツールの開発に携わっている教師からは、「日本語教育業界は今後、世界中の若い世代の学習者や、日本語教育分野のみならず情報科学の分野の人たちとも連携していかなければならない」といったコメントも聞くことができた。

本セッションのグループでの話し合いを通して、教師同士でもふだん使っているツールの情報を共有する機会があまりないため、新しいツールの情報に加え、従来からのツールでも違った使い方があることを知ることができ、有意義であったという声が聞かれた。そして最後に、学習目的・学習方法が多様化し、学習ツール自体も大きく変化してきている今、教師は自分の授業や学習者へのアドバイスなどを今一度振り返る必要があるであろうということを全体で確認した。ただし、そこには「今後はこうするべきだ」というような唯一の正解はないため、同僚や学習者と情報共有し、教師も変化していく必要があるという提案をして締めくくった。

5. まとめと今後の課題

以上、「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」をテーマとして行ったワークショップについて、その詳細を報告した。

ワークショップ終了後、参加者のうち43名より事後アンケートへの回答を得た。43名の全員が今回のワークショップについて「とても参考になった」(35名)あるいは「参考になった」(8名)と回答しており、日本語学習者の生の声が聞けたことや、種々の学習ツールについて具体的に多くの情報を得ることができたという点が有意義なものとして評価された。また、ゲストスピーカーを迎えた対話形式の発表と、グループでの話し合いを組み合わせた形もよかったとの評価が寄せられ、ワークショップの進め方として今後参考としたいという声もあった。

今回のワークショップの目標は、学習ツールを1つの切り口として、教師と学習者、教師同士、学習者同士など、またツール開発者も交えた形で種々の情報を共有し、また、それをきっかけに、これからの日本語教育についてともに考えてみるということであった。結果的に、日本語教育をとりまく環境が急速に変化しつつある中で、このような情報共有の大切さに今一度気づかされるワークショップとなったのではないかと思われる。当日は、ワークショップ終了後に1時間程度の情報交換会の場を設けたが、ここでも参加者同士の活発なやりとりが行われていた。

アンケートのコメントにも見られた点であるが、今後も、例えば初級レベルの学習者からの声を聞いたり、教師のツール使用に焦点を当てた情報交換を行うなど、ツール使用を切り口として、日本語教育について積極的に考えていく機会を作っていきたい²⁴。

(執筆分担：1, 2, 3.1, 4.1, 5 鈴木、3.2.2 中村、4.2 清水、3.2.1 渋谷)

(本研究は、日本学術振興会学術研究助成金平成 29 年度～31 年度基盤研究(C)「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」(課題番号：17K02842, 研究代表者：鈴木智美)の助成を受けて行われている。)

参考文献

- 鈴木智美 (2012) 「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38号 pp.1-16
- 鈴木智美 (2017) 「辞書ツールは文法的正確さの産出につながるか—ICT時代の日本語学習者の効果的な辞書使用を考えるために—」『日本語教育と日本研究におけるイノベーション及び社会的インパクト』(第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集)pp.129-147
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子 (2018a) 「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第44号 pp.195-217
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰 (2018b) 「世界の日本語学習者は今どのような学習ツールを使っているか—ICT時代の日本語教育の鍵をツール使用状況から考える—」第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「多言語世界における日本語教育の変遷」(香港日本語教育研究会)口頭発表資料
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子 (2019 予定) 「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号

²⁴ その1つの試みとして、平成30年度日本語学校教育研究大会(2018年8月8日)では、教師のツール使用に焦点を当てた「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」というテーマで分科会を行った(担当：渋谷博子・清水由貴子・鈴木智美)。

What Kind of Learning Tools
Japanese Language Learners Use in the ICT Age :
A Report on a Workshop Targeted for Japanese Language Teachers

SUZUKI Tomomi, NAKAMURA Akira,
SHIMIZU Yukiko, SHIBUYA Hiroko,

Key Words: Learning Tools, Apps, Websites, Japanese Language Teachers, Learners

The purpose of this paper is to report on the workshop entitled “What Kind of Learning Tools Japanese Language Learners Use in the ICT Age” held at the Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies in March 2018.

In the workshop, the results of the survey of the usage of learning tools by Japanese language learners were reported. An international undergraduate student and an international graduate student also spoke about their experiences concerning their usage of learning tools. A former international student who developed, and maintains, a Japanese-English dictionary site popular among language learners supplied valuable information about how the site was developed and improved.

We finished the workshop with a group discussion, in which participants digested a lot of information obtained through the workshop, confirmed that the environment surrounding Japanese language education has been highly influenced by ICT, mainly through learning tools, and exchanged views on how teachers should cope with the situation in the future, in a constructive way.